

ポール・クローデルと〈表徴〉の詩的=靈的体系

—おとめマリア、教会、聖書¹

ドミニック・ミエ=ジェラル

(パリ・ソルボンヌ大学教授)

(訳=大須賀沙織)

フランスの文学的、文化的伝統は、その宗教的基盤を知らなければ正しく理解することができません。496年にフランク族の王クロヴィスが洗礼を受けたのと同時にキリスト教の土地となり、クロヴィスによってフランク王国の名を与えられたこの土地は、やがてフランス王国となり、「教会の長女」となります²。歴史の中で、国内外の対立がさまざまにあり、ときにひどく暴力的で破壊的な変遷をたどってきたとはいえ、フランスはキリスト教国として選ばれたその地位によって特徴づけられており、そこではおとめが重要な役割を果たしています。フランスの大聖堂の大部分がノートルダムと名付けられているのも偶然ではありません。文学と諸芸術はおとめについて伝え広めています。それは非宗教化が強いられた時代にあっても変わらず、こうした時代においては逆に、おとめは出現という恵みをフランスに与え

¹ 本論は、2018年11月5日、首都大学東京にて開催された講演会「Paul Claudel et le régime poético-spirituel de la "figure": La Vierge Marie, l'Église, l'Écriture」(首都大学東京人文科学研究科フランス文学教室主催、ポール・クローデル生誕150年記念企画委員会共催、(公財)日仏会館後援)の翻訳である。ご協力いただきました関係者の皆様に深く御礼申し上げます。本論の主題である「おとめマリア」は、日本では「聖母マリア」という表現が好まれるが、フランスでは多く「la Vierge Marie」(おとめマリア)、「la Sainte Vierge」(聖おとめ)、「la Vierge」(おとめ)と呼ばれる。本論ではフランス語原文に合わせて訳出した。

² Marquis de La Franquerie, *La Vierge Marie dans l'histoire de France*, éd. Résiac [1939], rééd. 1985, p. 27.

てきたように見えます。ルルドは世界中から巡礼者を引き寄せ、ルルドほどではないものの、ラ・サレット、ポンマンやその他の場所でも、人々の熱意は今なお生き生きと保たれています。

19世紀から20世紀への転換期、文学における象徴主義の流れとともに、多くの作家がマリア信仰を取り戻しました。それらの作家たちの中で、ポール・クローデルは顕著な例です。本日は、クローデルがフランスにおけるマリア崇敬の歴史の中にどのように組み込まれたか、彼の信仰心が文学の中でどのように表現されたかを見ていきたいと思います。また、おとめが担う象徴的役割について、クローデルは非常に重要な注釈的省察を行い、おとめはその役割によってきわめて詩的な地位を与えられていますが、それがどのような省察であったかを考察したいと思います。

フランスと聖おとめ

ここで、ルイ13世にさかのぼる一つの伝統を取りあげたいと思います。それはレオン・ブロワの有名な一節³によって知られるものですが、クローデルもまた、フランスと聖母マリアとをつなぐ特権的絆を喚起しています。

私の大おじは、タルドゥノワのヴィルヌーヴ＝スジュール＝フェールの司祭でしたが、私の洗礼の日、私の名前にマリアを付け加えました。そのため、聖母被昇天はいつも私にとって、フランスにとって長いことそうであったように、とりわけ重要な国の祝日でした⁴。

たしかに、おとめマリアの死を記念する日であり、同時にマリアの昇天の日でもある（そのため「被昇天」と呼ばれる）8月15日は、ルイ13世が1638年に立てた誓願を更新する日であり、ルイ13世が、長いこと待ち望んだ息子、のちのルイ14世、デュードネ（神の賜物）とも呼ばれた子の誕生を神に感謝する日でした。その誓願とは自分自身と、家族とフランス王国とをおとめに捧げるというものでした。8月

³ *La Femme pauvre* [Mercure de France, 1897], Deuxième Partie, chap. III, *ad finem*.

⁴ Paul Claudel, *La Rose et le Rosaire* [Églouff, 1947], cité sur *Œuvres complètes*, t. XXI, Gallimard, 1963, p. 165.

15日はおとめのもっとも大きな祝日であり、夏の盛りに大行列が行われますが、クローデルは『薔薇とロザリオ』の壮麗な冒頭で次のようにたたえています。

8月15日

8月15日は一年の頂点を印しており、聖おとめが黄金の束を腕に抱き天に昇る。霊肉の短い分離のあと、その肉体は魂と合流するよう招かれたのである。[…] 蜂蜜と小麦のじゅうたんが地の果てから果てまで広がり、仮祭壇のおとめは、心臓によって示されるあの鍵を胸に抱きしめ、娘たちの肩に担がれ前進する⁵。

ほかに大きな祝日として、お告げの祝日（3月25日）、大天使ガブリエルがおとめのもとにやってきて、男の人を知ることなしに子を産むだろうと告げた日、中世・ルネサンス期のフィレンツェ派によってとりわけ優美に描かれた祝日があります。また、無原罪の御宿りの祝日（12月8日）、原罪による欠陥を被ることなしに懐胎した唯一の出来事を祝う祝日。そしてもちろん御降誕祭、この祝日は、幼子イエスの祝日であると同時におとめの祝日でもあります。これらすべての祝日は甘美な喜び、母性的優しさが刻み込まれています。さらに、日に三度唱えられる聖おとめの記念の祈り、アンジェルス（お告げの祈り）があります。フランスの教会で、原則として朝6時、正午、夕方6時に、鐘が鳴らされ、喜ばしいメロディーとともに唱えられます。かつて農民たちはこの時間になると畑仕事をやめて、天使祝詞を唱えました。クローデルはまさに『マリアへのお告げ』と題した劇作品で次のように伝えています。

沈黙。——そして突然、冴えわたる音で、空高くから、アンジェルスの最初の響き。ピエールは帽子をとり、二人はともに十字を切る⁶。

⁵ *Ibid.*, p. 168-170. 蜂蜜と小麦は聖書的表象であると同時に、フランスの夏、田舎で見られる現実の風景でもある。

⁶ *L'Annonce faite à Marie* [édition de *La Nouvelle Revue Française*, 1912], cité sur *Théâtre*, t. II, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1971, p. 15, également p. 113. ミレーの有名な〈晩鐘〉もある。

キリスト教の偉大な詩人ダンテがすでに、『神曲 煉獄篇』第8歌の有名な詩句で夕方のアンジェルスがもつ穏やかな詩的美しさを喚起していました⁷。クローデルも次のように表現しています。

突如、夕方のアンジェルスが、フランスのすべての鐘楼で鳴りはじめ、明瞭に数を刻みながらこう宣言しはじめる。「御言葉は肉となり、われらのうちに住みたまえり」と。そして、連打される鐘の音が狂おしく、この知らせを畑や森のほうへと伝える中、人々はみな帰宅するため歩きはじめる。それは、点々と行列をなしての帰り道であり、農民が馬たちのうしろになり、羊飼いの女は牛やヤギの小さな群れのうしろになって歩いていく⁸。

クローデルと同時代の詩人であり、彼の友人でもあったフランシス・ジャムもまた、詩集の一つを『夜明けのアンジェルスと夕べのアンジェルス』（1898）と題し、フランスの田舎がもつ甘美な静けさを喚起し、田舎の村々、畑仕事、人と動物と植物界が相互浸透しあう風景とともに描いています。

フランスとおとめとの緊密な結びつきはとても古く、考古学的、芸術的証言が数多く存在します。異教時代のガリアはすでに、おとめなる母への信仰に通じていました。とりわけシャルトルでは、その信仰の場に大聖堂が建てられました。ユイスマンスはまさに『カテドラル』と題された小説で次のように伝えていきます。

ヨアキムの娘 [マリア] が生まれるずっと以前に、ドルイド僧たちは、現在シャルトル大聖堂の地下納骨堂となっている洞窟に「子を産むおとめ (*Virgini parituræ*)」の祭壇を築きました。彼らは一種の恩寵によって、救い主の母なる方は汚れなきお方であろうと直観したのです。それゆえシャルトルでは、ほかのいかなる場所よりもずっと古くからマリアとの友好関係を

⁷ Dante, *La Divine Comédie, Purgatoire* VIII, v. 4-6: 「夕刻、新たな旅人が愛に胸を痛めるとき、遠くに鐘の音を聞けば、その音は消えゆく光に涙するかのよう。」

⁸ *La Rose et le Rosaire, op. cit.*, p. 263. 『ヨハネ福音書』のプロローグ「御言葉は肉となり、われらのうちに住みたまえり」は、お告げの祈りでアヴェ・マリアを挟んで交互に交わされる短い対話の第3節をなす。

もちつづけてきたように思われます⁹。

また、ロマネスクの神秘的な黒いおとめ像があります。もっとも有名なのは、シャルトル、ロカマドゥール、ル・ピュイのもので、どれも巡礼の対象となっています。

フランスの芸術は、おとめの偏在性を反映しています¹⁰。おとめはいたるところに存在し、とりわけゴシック期、「フランス人の作品 (*opus francigenum*)」と呼ばれる芸術作品が生まれた時代に顕著に見られます。おとめに捧げられた大聖堂では、正面入り口中央の柱に刻まれています。パリの大聖堂では「ノートルダム・ド・パリ」の名をもち、優雅に腰を傾けた彫像が内陣の入り口に立っています。12世紀のシャルトル大聖堂では、すばらしい青で彩色された名高い「美しき絵ガラスのノートルダム」がステンドグラスに描かれ、パリのノートルダムでは北側交差廊の大きな紫色の薔薇窓に描かれています。小さな象牙の彫像は13世紀パリの美術に特徴的な作品ですが、世界中の大きな美術館で見られます。

文学も例外ではありません。おとめは初期キリスト教の時代から、とりわけギリシャの教父たちによって高度な詩的テキストの中で歌われており、クローデルはそのラテン語訳をローマ式聖務日課書で読んでいました¹¹。12世紀フランスのブルゴーニュの聖人、クレルヴォーの聖ベルナルルにとって、おとめはその素晴らしい説教の主題となりました。彼こそが、伝統的におとめに与えられてきたあの「星」の名について解説した人物であり、それが日本にまで伝わることになったのです。

「おとめの名はマリアといった」（ルカ 1 章27節）。この名についてひとこと触れておこう。マリアという名は「海の星」を意味しており、おとめなる母にいかにもふさわしい。たしかに、おとめが一つの星にたとえられるのは正

⁹ J.-K. Huysmans, *La Cathédrale* [Stock, 1898], cité sur Gallimard, « Folio », 2018, p. 113.

¹⁰ このテーマについては、フランス中世宗教美術に関するエミール・マールの見事な著作を参照。Émile Mâle, *L'Art religieux du XII^e siècle en France*, A. Colin, 1922 ; *L'Art religieux du XIII^e siècle en France*, E. Leroux, 1898 ; *L'Art religieux de la fin du Moyen Âge en France*, A. Colin, 1908. 再版多数。

¹¹ Saint Germain de Constantinople, saint Jean Damascène. 聖務日課書の無原罪の御宿りの8日間（12月8日とそれに続く1週間）にすばらしいテキストがある。

当なことである。なぜなら、星がそれ自体いかなる変化もこうむらず光を送るように、おとめは処女性を保ったまま子を生んだからである。光はそれを発する星の輝きから何も奪いはしない。同様に、子の誕生はおとめの完全性を何らおとしめることはなかった。[...] それは廣大無辺な海の上に必ずや浮かんでいる、いとも美しい輝く星である。この星はその美徳によって輝き、その模範によって照らしている¹²。

この星のイメージは、シャルル・ペギーによっても取りあげられています。

海の星よ、ここに広がる重厚な祭壇布をごらんください
小麦の海と深いうねり
揺れ動く泡立ちと豊かな穀倉地帯
あなたの視線をこの広大な祭礼マントの上にお注ぎください¹³

そしてふたたびダンテ。「マリアを讃える詩の中でもっとも崇高なこの詩篇」¹⁴があります。

母なるおとめにしておん子の娘
謙虚にして、いかなる被造物より高貴な
神意により定められたるお方

おんみによりて、人間本性は
気高くせられ、崇高なる造り主は

¹² Saint Bernard, II^e *Homélie Super Missus est*, *Œuvres*, trad. M.-M. Davy, t. II, Aubier, 1945, p. 175.

¹³ Charles Péguy, *Présentation de la Beauce à Notre-Dame de Chartres* [*Bulletin des professeurs catholiques de l'Université*, Supplément, 20 janvier 1913], cité sur P. Régamey, op. *Les Plus Beaux textes sur la Vierge Marie*, La Colombe, 1942, p. 305 ; *Œuvres poétiques complètes*, Gallimard, « Bibl. de la Pléiade », 1975, p. 896.

¹⁴ P. Régamey, op. cit., p. 165.

自らをおんみの作品とすることを拒まざりき。

おんみの胎内に愛が灯り

その愛の熱が永遠なる平安のうちに

芽生えさせしこの天上の花¹⁵。

ふたたびフランスとフランス語に戻ると、ダンテから1世紀ののち、フランソワ・ヴィヨンはその見事な詩「ノートルダムに祈るためのバラード」でこう歌っています。

天の元后、地上の摂政さま

地獄の沼の皇后さま

あなたさまのしがないキリスト教徒なるわたしをお受けください。

選ばれし者たちの中にお入れください。

まったく値せぬ身ではございますが。

わが貴婦人、わが女主人よ、あなたさまのお恵みは

わたしが罪人である以上に、はるかに大きく、

そのお恵みなしには、魂は天国に行くことができません。

わたしはうそは申しません。

この信仰において、生き、そして死にたいのです¹⁶。

これこそ、クローデルが言うおとめの「神秘的な話しやすさ」¹⁷であり、それをこれから詳しく見ていくことにしましょう。

¹⁵ Dante, *Paradis*, XXXIII, v. 1-9, traduction d'André Pératé, 1913, cité sur P. Régamey, *op. cit.*, p. 165-166 ; *Œuvres complètes*, Gallimard, « Bibl. de la Pléiade », 1965, p. 1663-1664. 「花」は天上の薔薇のことであり、天国を意味する。

¹⁶ François Villon, « Ballade pour prier Notre-Dame », citée sur P. Régamey, *op. cit.*, p. 189 ; *Œuvres complètes*, Gallimard, « Bibl. de la Pléiade », 2014, p. 89.

¹⁷ *La Rose et le Rosaire*, *op. cit.*, p. 178.

ポール・クローデルと聖おとめ

ポール・クローデルは、1886年のクリスマスに、パリのノートルダム大聖堂で「回心」の体験をしましたが、それは聖おとめのしるしのもとで起こりました。その出来事を記す有名なテキストで、彼はこう語っています。

白服を身につけた聖歌隊の子どもたちと、彼らを補助するサン・ニコラ・デュ・シャルドネ小神学校の生徒たちが、歌を歌っているところだった。それは、私はのちに知るようになるが、マニフィカト [晩課に歌われる聖母賛歌] であった。私は人混みの中、内陣の入り口の右側、香部屋側の、二本目の柱のそばに立っていた。そのとき、私の一生を支配する出来事が起こった。一瞬のうちに、私の心は触れられ、「私は信じた」。[…] 突如、胸を引き裂くような無垢の感情、永遠なる神の幼年期、えも言われぬ啓示を受けたのだった。[…] 秘跡にはまだなじみがなかったものの、私はすでに教会の生命に与していた。私はようやく呼吸をし、生命が毛穴全体から私の中に入ってきた。(クローデルはこの時期、パスカル、ボシュエ、ダンテ、修道女エメリックを読んでいる。) しかし、私の前に開かれ、私が教育を受けた偉大なる書物は、教会であった。この荘厳にして偉大なる母は永遠にたたえられよ！私はこの母の膝によりすがりひれふしてすべてを学んだのだ。[…] 宗教劇が私の想像力のすべてを上回る壮麗さをもって私の前に繰り広げられていた。[…] それはもっとも深遠でもっとも壮大な詩であり、人類に託されたもっとも厳かな武勲詩だった¹⁸。

ここで「母」という語が教会に適用されていることに気づかれるでしょう。カトリック典礼では実際、「母なる教会」という言い方がなされますが、このように私たちは「表徴の体系」の中に入っていくのです。大文字の「教会」はここでは、石造の建造物のことではなく、「キリストによって打ち立てられ、全世界に広まった

¹⁸ « Ma conversion » [*Revue de la jeunesse*, 10 octobre 1913], *Œuvres en prose*, Gallimard, « Bibl. de la Pléiade », 1973, p. 1010-1013. マニフィカトのテキストは、『ルカ福音書』1章46-55節を参照。

信徒たちの社会¹⁹として理解されます。ですから、神秘的社會、神秘の実体であり²⁰、女性的で母性的な実体であり、多くの点でおとめマリアと混同されます。一つはキリストの母という点であり、もう一つは神秘的な花嫁という点です。アンリ・ド・リュバック神父はこう述べています。

伝統の中で、聖書上の同じ象徴が、代わる代わる、あるいは同時に、ますます豊富に溢れ出て、教会とおとめに適用されている。両者とも同時に、樂園であり、イエスという果実の実る樂園の樹木であり […]、契約の櫃であり […]、天国の門であり […] 神の都であり […]、花婿の前に出るために身を飾る花嫁であり […] 太陽をまとった女であり […] 知恵の住処 […] なのである。

ここでは、並行関係あるいは両義的象徴が交互に使用されているだけではない。非常に早く、キリスト教徒の意識はそのことを感じとり、何世紀もの間、数多くの仕方で、芸術、典礼、文学の中で表明されてきた。マリアは「教会の理想的な表徴」であり、[…]「教会全体が映し出される鏡」である。いたるところで、教会はマリアのうちに、自らの類型と模範、自らの起源の地点と完成の地点を見出す。マリアは生涯の各瞬間に、教会の名で語り、行動している。「マリアは自らの姿／表徴 (*figura*) を聖なる教会の中に明示する。」 […] なぜなら、いわばマリアは教会を抱き、その人格の中に教会全体を含んでいるからである²¹。

ここに見られるとおり、人間の言葉でこうした神秘的関係を表現するには、詩的言

¹⁹ *Catéchisme du diocèse de Paris*, 1895, p. 66.

²⁰ このテーマについては、アンリ・ド・リュバックの美しい著作を参照。P. Henri de Lubac, sj, *Méditation sur l'Église*, Aubier, 1953.

²¹ Henri de Lubac, *Méditation sur l'Église*, sur éd. Aubier, 1968, p. 268-269. 本書の豊富な註を参照されたい。クローデルの『薔薇とロザリオ』にはこうある：「それにしてもなぜいつもマリアは、嘆き悲しむ聖女たちの一群と混じり合い、息子に付き従う姿で描かれているのか？教会の表徴である彼女こそ常に、神があらゆる計画に先立って据えるお方、莊嚴に道を開くお方、呼び、待ち、要求し、希求するお方なのではないか？」(*La Rose et le Rosaire*, *op. cit.*, p. 289)

語を用いるしかありません。互いに出会い、重なり合うイメージを用い、聖書の美学と西洋のレトリックが交差する法則に従わなければ表現することはできません。詩人クローデルは、この豊穡な領域に無関心でいることができず、自らの作品の中でたえず開拓していったのです。

はじめに、クローデルが素朴な打ち解けた言葉遣いでおとめに呼びかけている例を見てみましょう。それは、保護者なる母という存在を聖おとめの中に見る民衆の伝統的な信仰に連なるもので、「正午のおとめ」と題された有名な詩です。

正午だ。教会が開かれているのが見える。入らなければならない。
イエス・キリストの母よ、私は祈りに行くのではありません。

私には捧げるものも、求めるものもありません。
私はただ行きます、母なるお方よ、あなたを眺めるために。

あなたを眺め、幸福に涙を流し、
私があるあなたの息子であり、あなたがそこにおられることを知るために。

ただ一時、すべてが止まる
正午！
マリアよ、あなたがおられるこの場所であなたとともにいるために。

[…]

なぜならあなたは美しく、汚れなきお方だから
恩寵のなかで、ついに再生された女性だから。

[…]

イエス・キリストの母よ、感謝をお受け取りください²²。

おとめマリアは、より複雑な形で、常に鏡の働きによって表現されており、この働きは表徴によってさまざまなレベルの現実の中に打ち立てられています。マリアは西洋カトリック文学の中で強力なモデルとなり、女性のヴィジョンを広く支配しています。

洗礼の秘蹟が水を聖化したように […]、マリアが神に選ばれたことにより女性は聖化され、すべての女性は、神のために、我々を自己の外へと引き出す能力を与えられた。 […] 女性は我々に自分自身よりも何か別のものを好むことを教えてくれる […]。しかしながら、我々人間本性の墮落した状態においては、女性とともに二重の危険がもたらされる。神以上に女性を愛する危険と、女性によって明らかにされた自分自身を、女性以上、神以上に愛する危険である。 […] 女性は我々の目に、我々の腕の中に、価値のはかりしれない婚姻のしるしをもたらし。欲望を与えながら、その口づけによって、彼女は欲望を満たすことはできないと我々に告げるのだ。彼女は我々の内に消すことのできない失望の火を灯す。しかし信仰によって我々は、彼女がマリアへの入り口であり、マリアの姉妹であることを学ぶ。彼女は […]、地上の楽園にあったときすでに、我々の贖いの約束と任務が正式に託されたマリアの姉妹なのである²³。

この主題は、西洋の宮廷風恋愛文学の美しい伝統だけでなく、破壊と同時に救済をもたらす恋愛の弁証法とも結びつけることができるでしょう。数ある例の中で、バルザックの『谷間の百合』、ワグナーの『タンホイザー』、クローデルのすべての戯曲が思い浮かびます。これらの作品はおとめマリアへの信仰がなければ存在しえ

²² « La Vierge à midi » [*Autres Poèmes durant la guerre*, éd. de La NRF, 1916] ; *Œuvre poétique*, Gallimard, « Bibl. de la Pléiade », 1967, p. 539-541.

²³ *La Rose et le Rosaire*, op. cit., p. 225-226. 『繻子の靴』、タイトルの起源となった場面(1日目第5場)も参照。

ず、マリアはモルソフ夫人、エリザベット、プルエーズにモデルを提供しているのです。

表徴の体系

ここからは、西洋思想の根本にあるこうした表徴の体系がどのように機能しているか、よりよく理解できるよう努めてみましょう。まず、聖書の中で聖おとめが実際に登場する場面を、物語的視点から考えてみましょう。実は彼女は聖書の中にそれほど多くは登場しません。彼女が現れるのは受胎告知、キリスト降誕、神殿への奉獻、エジプトへの避難、学者たちの中のイエスといったよく知られた場面です。これらイエスの幼年期のエピソードにおいて、彼女は「普通の」母親として現れます。ただ一つの例外は、彼女の子が男性によってもうけられた子ではないという点です²⁴。おとめは次に、キリストが公生活をはじめたあと、カナの婚礼の場面で現れます²⁵。その後、イエスの受難と死の場面で劇的に描かれ、「悲しみの聖母」と「ピエタ」のテーマとなります。また、福音書にはありませんが、伝承によれば、彼女はイエスの復活に立ち会ったとされています。そして最後に、『使徒言行録』では、イエスの昇天の直後に言及されているほか、聖書外典と呼ばれる類似テキストがアネクドートの物語を提供しており、文学と絵画の伝統によって伝えられています。

しかしもちろん、これがすべてではありません。まさにここに「表徴 (figure)」が介入してくるのです。キリスト教のラテン語では、「フィグラ (*figura*)」²⁶という語によって、何らかの前兆、「実現されるべき預言」²⁷を意味します。この場合、旧約聖書の一節や人物が来たるべき出来事を隠された形で予告しています。「フィグラは現実的で歴史的な何かであり、その何かは、同じように現実的で歴史的な別の

²⁴ 『ルカ福音書』 1章34節

²⁵ 『ヨハネ福音書』 2章1-12節

²⁶ この語の意味論的展開については、エーリヒ・アウエルバッハ『フィグラ』を参照：Erich Auerbach, *Figura* [*Archivium romanicum*, vol. XXII, Florence, 1938, p. 436-489], trad. fr., Belin, 1993.

²⁷ Erich Auerbach, *Figura*, Belin, p. 31.

ものを表象し、予告している]²⁸のです。パスカルは『パンセ』の一部分全体を「表徴的法則 (Loi figurative)」と題し、この根本的問題についてキリスト教教父たちの思想を発展させています。『パンセ』のこの部分はクローデルが好んだ部分でもありました。「旧約聖書は符合 (chiffre) である」²⁹とパスカルは言っています。しかもこの解釈は、新約聖書それ自体によって推奨されています。キリスト自身が、復活の晩、エマオに向かう弟子たちにこうした解釈の仕方を教えていますし³⁰、パウロも、ヘブライ人や紅海の通過、マナや水の噴き出る岩について教え、「これらのことはすべて前兆として (en figure) 彼らに起こったのです」³¹と述べています。こうした読書体系は、宗教改革によって拒絶されたとはいえ、キリスト教と本質的に結び付いたものであり、聖おとめの解釈にも適用されてきました。したがって、『イザヤ書』7章14節の有名な一節「見よ、おとめが身ごもって、男の子を産む」は、メシアが処女から生まれるという預言的知らせとして読まれてきました。そこから、旧約聖書のさまざまな比喩、および比喩のネットワークがおとめマリアに適用されてきました。それは「比喩的意味の拡張」と呼ばれるもので、さきほど引用したアンリ・ド・リュバック神父からの抜粋でいくつかの例を見ました。こうした比喩的箇所の多くは旧約聖書の詩的テキストから取られており、マリア典礼に豊富に用いられ、一般信徒にもよく知られています。『雅歌』、『シラ書 (集会の書)』、『詩篇』、そして、クローデルにとってとても大切な『箴言』8章などです³²。たとえば、おとめがキリストによって戴冠される美しい場面は、大聖堂のタンパンによく見ら

²⁸ *Ibid.*, p. 32.

²⁹ Lafuma n° 276 ; Brunshvicg n° 691. 「符合 (chiffre)」はここでは「コード化された言説」の意味である。

³⁰ 『ルカ福音書』24章27節：「イエスはモーセをはじめ、すべての預言者を取りあげ、聖書の中でご自分と関係する部分全体を彼らに説明された。」

³¹ 『コリントの信徒への第一の手紙』10章11節：「これらのことはすべて前兆 (*figura*) として彼らに起こったのです。」

³² 『箴言』8章、この壮麗なテキストをクローデルは回心のその夜に発見したと述べている：「教会が威厳をもってこれらのすばらしい言葉をあてはめるよう促すのは、神話的人物にではなく、歴史的な生きた被造物であるマリアになのだ。」(« L'Institution de Lourdes » [ms 1953], OC XXV, p. 532).

れますが、『雅歌』4章の「おいで、あなたに冠をかぶせよう」³³から来ています。あけ
 暁の星³⁴、月、虹、薔薇は『シラ書』50章から来ています。こうした例は数え切れ
 ません。クローデルの詩的想像力はこの基層に接ぎ木され、おとめに捧げられたテ
 クストで見事に繰り広げられます。

それは彼女なのだ！彼女なのだ！彼女への思いに満ちた聖書全体が、スパン
 コールをちりばめた布地のように、私の記憶の中で、音節のはじける音の中
 で、火がついている！彼女なのだ！彼女なのだ！主はエヴァの口の中にマナ
 の粒を置き、禁じられた果実の味を消し去り、アダムにその粒を伝えたが、
 そのマナの粒とは彼女なのだ。聖なる歴史全体を歩ませた星は彼女なのだ³⁵。

別の例は、『剣と鏡』と題されたすぐれたマリアの黙想の中に見られますが、こ
 のタイトルは表徴の体系によってのみ説明されます。「剣」は、福音書の中でシメ
 オンがおとめに告げた預言の言葉からとられており³⁶、それは「彼女の手の中で十
 字架の略号となり、彼女はその犠牲者であり、作り手でもあるのです。この太刀打
 ちできない道具、この積み重なる刃は、森の中で道を切り開き、その切り開かれた
 道を教会は通っていくのです」³⁷。そして鏡については、こう書かれています（およ
 そらくここにはアマテラスの記憶が働いています）。

さきに述べた剣は、地中に植えられ、花を咲かせた。十字架は剣の二倍の直
 径によって規定された完全な円を作り出したが、この円とは鏡なのだ。鏡に
 は受動的役割と能動的役割がある。受動的役割は、像を忠実に受けとり、枠
 の中に収め、適合した面に保つことである。能動的役割は、受けとった像

³³ 『雅歌』4章8節。このテーマについては、クローデルによる美しい展開を参照：
 « *Fulgens corona* » [La Revue de Paris, mars 1955], OC XXI, p. 427.

³⁴ 『ヨハネ黙示録』2章28節、22章16節にもあり。ここではキリストを表す。

³⁵ *La Rose et le Rosaire*, op. cit., p. 245.

³⁶ 『ルカ福音書』2章35節：「あなたも剣で心臓を刺し貫かれるでしょう。」受難の予告。

³⁷ *L'Épée et le Miroir* [Gallimard, 1939], OC XX, p. 155.

を、こちらに向けられた別の鏡に示し、伝えることである。すると、受けとった像の刻印は別の鏡の中で受け入れられ、生成される。無原罪のおとめが果たしているのは、この二重の機能なのだ […]。母なるおとめの魂は、キリストの受肉に関する秘儀を、不変なる形質のもとで潤し、再現し、定着させるのに適した素材をなしていないだろうか？ […] おとめは一つの像を内包するだけでなく、受肉させ、生成する。彼女は神の母である。彼女は聖霊の働きのもとにあり、神を生み、神を人間と同化しうるものとし、人間の肉体と視線とにおいて、神を完全に具現化する。子なる神を具現化した人間として差し出すのは彼女である。神がキリストを生み出す限り、それもただ一度ではなく、いつの時代にもキリスト教徒の心の中に生み出しているのであるが、マリアは生殖原理の全エネルギーのうちにある父なる神と結ばれる³⁸。

鏡のイメージは『知恵の書』（7章26節）から来ています。それは「神の威厳を映す曇りなき鏡」であり、「知恵」からおとめへと通過します。おとめは月とも結びつきます。『詩篇』（88篇38）の「満月」や、『雅歌』（6章9節）の「満月のように美しく」や、『黙示録』（12章1節）の女の足の下にある月が、おとめの複合的なイメージを形成しています。そのイメージは、クローデルの純正な詩的作品、とりわけ『繻子の靴』の中で、中国や日本の詩に描かれる月とも混じり合いながら見出されるでしょう³⁹。

*

いまやみなさまは、本日のポスターに使われた美しい画像の意味をよりよく理解できるのではないのでしょうか。幼子を抱くおとめが、日本の典型的な風景の中で、

³⁸ *Ibid.*, p. 158-160. 『イザヤ書』11章1節、エッサイの株を暗示。

³⁹ D. Millet-Gérard, « Théâtre et récit : la scène de La Lune dans *Le Soulier de Satin* », paru dans [Coll.] *Paul Claudel 19, Théâtre et récit*, dir. Pascale Alexandre-Bergues, La revue des lettres modernes, Minard, 2005, p. 127-148. Repris dans D. Millet-Gérard, *Le Verbe et la Voix, vingt-cinq études sur Paul Claudel*, Classiques Garnier, 2018.

一つの星と重ね合わせて描かれています。おとめは「天の元后 (*Regina caeli*)」であると同時に、「海の星 (*Stella maris*)」であり、「暁^{あけ}の星 (*Stella matutina*)」でもあります(富士山の背後に夜明けの光が見えます)。この絵には、クローデルとも結びつく歴史があります。日本の政治で重要な役割を果たした海軍軍人山本信次郎(1877-1942)は、クローデルの日本人の親友の一人でしたが、彼がイタリア人の女流画家にこの絵を描いてくれるよう依頼しました。それは「輝ける暁の星なるマリア」の保護を求める祈りに添えるためで、山本自身が学び、洗礼を受けたマリア会の暁星中学校を想起させるものでもありました。1921年の秋、クローデルはフランス大使として日本に到着するや、最初の訪問先の一つとして暁星中学校を訪れました。大部分が日本で書かれたすぐれた戯曲『繻子の靴』には、この絵の影響が見られます⁴⁰。おとめ像そのものは象徴的な星の上に配置され、西洋的図像の再現でありながら、日本的装置の中で、日本画風の様式と混じり合い、複合的に表現されています。日出ずる国を見守るおとめ=教会が描かれ、布教の意味が込められたこの画像はおそらく、「表徴の詩的=霊的体系」を表すもっとも美しい挿絵の一つだと言えるでしょう。

Dominique Millet-Gérard, « Paul Claudel et le régime poético-spirituel de la “figure” : la Vierge Marie, l’Eglise, l’Écriture ».

⁴⁰ Richard Griffiths, « *Stella Matutina* : Claudel, Massignon, Yamamoto et *Le Soulier de satin* », *Essais sur la littérature catholique (1870-1940) : Pèlerins de l’absolu*, Classiques Garnier, 2018.



ルイザ・フランキ=ムッシーニ「暁の星なる聖母」

Luisa Franchi-Mussini, *Stella Matutina*

©片瀬教会⁴¹

⁴¹ カトリック片瀬教会「教会の歴史」<http://www.catholickatase.com/history/> 片瀬教会の広報担当萩原桃子様には「暁の星なる聖母」についてご教示いただき、画像掲載のご許可をいただきました。心より感謝申し上げます。